入選

— 中学生以下の部 —

足立遥さん

推　し　本：『掬えば手には』

著　　：瀬尾まいこ

推したい相手：社会で生きづらさを感じている大人の人達

足立遥

自分に自信がないから、一つの行動するのにも色んな感情が渦巻いてしまう―。こんな風に感じている人は、社会にどのくらい存在するのだろう。特に、社会で生きづらさを感じている大人の人達。私は、そんな人達に、この本を推したい。瀬尾まいこさんの、『掬えば手には』という本を。「ナンバーワンにもオンリーワンにもなれる要素がなくて、個性と言えるようなものは一つも持ち合わせていない。」なにをやっても真ん中の平均値にしかならない梨木匠は、ある日を境に、自分には『相手の気持ちを読む力』があると気づく。その能力で色んな人の心を開いてきた匠だが、新しくバイトに来た常盤さんはまったく心を開いてくれない。特別な能力にすがっていたい匠が、たくさんの優しさに出会い、本当の自分の能力に気づく切なく温かい物語。この本は、たくさんの優しさを感じ取れる本である、と推したい。この本を読めば、周りの人に対する気持ちや社会の見方が変わってくる。そして、とても寒い日に飲むスープのように、体中がじんわりあたたかくなっていく。私はそう感じた。まず、この本の「タイトル」と「色」。そこに優しさを感じ取れる。『掬えば手には』というタイトルと、蛍光色のような黄色。この二つが絶妙にマッチして、明るい光が心にそっと差しこんでくる。もう一つ、優しさを感じ取れる理由は、登場人物全員が優しい人であることだろう。それぞれに色んな過去があって、考えがある。それでも、それぞれがそれぞれのことを想って、優しい世界が広がっている。瀬尾まいこさんは、この本から究極の優しさを感じてもらうと同時に、もう一つ、伝えたいことがあると私は思う。それは、「行動する勇気」。この本の主人公である匠には、『相手の気持ちを読む力』なんて無かった。ただ、『行動する勇気』が誰よりもあった。「誰だって、完璧には遠くても人の気持ちぐらいなんとなくわかるものだ。ぼくに特別な力はないのかもしれない。だけど、ぼくは動ける。的外れでおせっかいかもしれないけど、動くことができる。」－。匠の言葉である。現実では、匠のように行動できる人は少ないのではないだろうか。私も、正義のヒーローのようにどんな時でも行動できやしない。ましてや大人の人達は、子供よりも行動できなく

なってしまっている気がする。長年の体験や経験から、今は無理に行動しなくても良いだろう、逆におせっかいになる、と思ってしまうのかもしれない。誰でも行動するのは怖い。人と違うことをしたくても、勇気がでない。世の中、そんなことだらけなのかもしれない。そんな中、匠はこんな言葉も言っている。「どんなことだって、やってみればそうたいしたことではないと、あのころよりは知っている。」行動した彼だからこそ、言える言葉。彼だから、知っていること。ふと思った。社会で生きづらさを感じている大人の皆さんは、行動することで生きづらさが減るのではないか。匠自身、行動することで、周りの優しさに触れ、幸せを感じている。自ら行動してみてはどうだろう。かと言っても、社会にはつらいことがたくさんある。コロナ、円安、物価高、インフレ、労働環境。子供の私にはまだまだわからないことだらけである。そんな世の中を、大人の皆さんは生きている。これはとてもすごいことであると思う。だからこそ、もっと世の中で幸せを見い出してほしい。つらい世の中でも、自分から行動することで、変わってくる。まずはどんなことでも良いから、どんなに小さな一歩でも良いから、どんなに小さな一歩でも良いから、動いてみてほしい。例えば、いつもよりちょっと早く職場に行ってみる。いつも読まない本を読んでみる。遠くの場所に住む友人に手紙を書いてみる。休日の早朝に、知らない場所へ散歩に行ってみる。ささいな行動から、始めてみる。そうすれば、周りの優しさにもたくさん気づいて、幸せな気持ちになれると思う。社会での生きづらさを、少しでも減らしてほしいと、強く思う。掬えば手には。勇気を出して、掬ってみる。その手の中には、きっと、たくさんの優しさと、温かさと、幸せであふれている。